

【共同研究】

多面的協調性尺度の作成と大学生の協調性

登張 真穂* 名尾 典子** 首藤 敏元*** 大山 智子**** 木村 あやの*****

Development of a Multifaceted Cooperativeness Scale: Cooperativeness in university students

Maine TOBARI, Fumiko NAO, Toshimoto SHUTO
Tomoko OYAMA, & Ayano KIMURA

The concept of cooperativeness was reconsidered as a collection of various aspects and a Multifaceted Cooperativeness Scale was developed on the basis of a study of university students. This scale consists of four subscales: Collaborative problem-solving, Harmoniousness, Uncooperativeness, and Cooperation. The relationship between the subscales of Cooperativeness and various traits and experiences was examined. Results indicated that Collaborative problem-solving, Cooperation, and Harmoniousness were correlated with variables that were assumed to be closely related to cooperativeness, and results also indicated that Uncooperativeness was inversely correlated with those variables. Moreover, Collaborative problem-solving and Cooperation were related to individuality, secure attachments, accepting heterogeneity in peer relationships, eager participation in club activities, and volunteering, but Harmoniousness was inversely related to individuality and not related to club activities or volunteering. Harmoniousness was also related to personal distress, evaluation apprehension, sensitivity to rejection, ambivalent attachments, and feeling pressure to conform from peers. Students in the liberal arts and club leaders scored higher in Collaborative problem-solving than students in the sciences and club members. In addition, students participating in student council, music clubs, and sports clubs scored higher in Cooperation than those participating in cultural clubs or those who were not a member of a club. Males scored higher on Uncooperativeness than females. Studies need to be conducted with other age groups and they need to incorporate additional variables and the validity of the Multifaceted Cooperativeness Scale needs to be examined further.

Key words : cooperativeness, construct validity, university students, club activities, volunteering
協調性、構成概念妥当性、大学生、サークル活動、ボランティア活動

* とばり まいね 文教大学人間科学部非常勤講師
** なお ふみこ 文教大学人間科学部臨床心理学科
*** しゅうとう としもと 埼玉大学教育学部
**** おおやま ともこ 白百合女子大学生涯発達研究教育センター
***** きむら あやの 昭和女子大学人間社会学部

問題

集団生活をする社会的動物においては、協力や連携、利他性等、協調性に関連する特性がみられることがあり、ヒトの協調性もそうした動物と共通する進化的基盤をもつことが、進化心理学の分野で指摘されている（トマセロ・橋本（訳），2013；山岸他，2014）。当然ながら、ヒトは家族から学校、企業、地域の共同体、国家、さらには国家の連合体に至るまで、大小さまざまな集団を作るとともに生活する社会的動物である。集団に属する個人はそれぞれ育ち方も違ふし、独自の考え方をもっており、同じ人が複数の集団に属している。そうした人々が集団の中でともに生活し、互いにうまくやっていくのにも、別の集団の人々同士がうまく平和にやっていくのにも、協調性は重要な役割を果たすと考えられる。この協調性は、心理学においてどのように捉えられているのだろうか。

心理学において、協調性はまずパーソナリティ特性として捉えられている。パーソナリティを5大因子で捉えるビッグファイブ・モデルは今では世界中で幅広い支持を得ているが、その5大因子の一つ、Agreeableness次元は、日本語では協調性（村上・村上，1997）、または調和性（和田，1996など）と訳されている。広辞苑第6版（新村，2008）によると、利害の対立する者同士が穏やかに相互間の問題を解決しようとする事、あるいは性格や意見の異なった者同士が譲り合って調和を図ること¹⁾を「協調」といい、周囲とうまく協調できる性質のことを「協調性」という。Agreeableness次元は、Agreeablenessという語の意味から考えると「人の良さ」というような概念を中核とするかなり広範囲の意味内容²⁾を含んでいるが、広辞苑の協調性の定義のうち「性格や意見の異なった者同士が譲り合って調和を図ること」と「周囲とうまく協調できる性質」という協調性の定義には対応していると考えられる。

ビッグファイブ・モデルのほかに最近注目されているパーソナリティ・モデルにCloninger, Svrakic, & Przybeck (1993) が提唱した4つの気

質次元と3つの性格次元によってパーソナリティを捉えるモデルがある。このモデルでは、協調性（Cooperativeness）は性格次元³⁾の一つとして捉えられ、他者との同一視および他者受容における個人差とagreeability（一致できること、仲良くできること）を示すと定義されている。

このように協調性は普遍的なパーソナリティ特性の次元の一つと捉えられている一方で、協調性の発達に文化が影響を与えているという見方もある。アメリカや西欧諸国の人々は、個人が他者から相互に独立した相互独立的自己観をもつ傾向があるのに対し、我が国など東アジアの人々は、人々が相互に調和し依存しあう相互依存的（協調的）自己観をもつ傾向があり（Markus & Kitayama, 1991）、我が国では相互協調的自己観を反映して、他者の評価を気にし、他者との対立を避け、他者に合わせようとする相互協調性が発展しやすいと指摘されている（高田，1999）。相互協調性は協調性に関連が深い概念であるが、相互独立性と対比されることや相互依存性とも言われることからわかるように、受動的な意味合いが強い。相互協調性は協調性の受動的側面を表しているとも考えられる。

一方、広辞苑の協調性の定義には、「利害の対立する者同士が相互間の問題を解決しようとする事」というより積極的な意味合いも含まれている。Yeates & Selman (1989) は、対人交渉方略の最も高いレベルでは、自分と他者の双方にとってより良い新たな協調的（協同的；collaborative）対人交渉方略がとられるとした。この内容は、上記の広辞苑の定義や、本明（1989）の「対人関係において、互いに利益になるように協力して行動し問題を解決するのが協同行動で、協同行動を起こす傾向を協調性という」という協調性の定義⁴⁾に合致しており、自分と相手の両方を尊重し、調和し協力し合って新たな解決策を生み出すという意味で、協調的であるとともに積極的、創造的でもあり、協調性のより高次の積極的、創造的側面を表しているとも考えられる。よって、協調性の概念に協調的対人交渉方略をとる傾向という内容を含めることは可能であろう。

これらのことから、協調性という概念は、普遍

的なパーソナリティ特性の次元の一つである Agreeablenessと Cooperativeness、相互協調性に示されるような受動的な意味合い、および協調的な対人交渉方略をとる傾向を含む多面的な概念として捉えることができると考えられる。これをふまえて、本研究では、協調性を「非利己的で、他者に対して受容的、友好的に接し、他者と競い合うのではなく、相手に合わせて調和を図ったり、協力したり、自分と相手の双方にとってより良い解決を目指したりする傾向」と定義する。

協調性を測定する既存の尺度もある。Agreeablenessを測定するCosta & McCrae (1992)が開発したNEO-PI-Rとその短縮版NEO-FFI（日本語版は下仲・中里・権藤・高山, 1999）の調和性尺度、村上・村上（1997）の協調性尺度、和田（1996）の調和性尺度、上述のCloningerらの理論に基づいて開発された気質と性格インベントリー（TCI）（日本語版は木島・斎藤・竹内・吉野・大野・加藤・北村, 1996）の協調性（Cooperativeness）尺度等である。このうち、NEO-PI-Rの調和性尺度には、信頼、実直さ、利他性、応諾、慎み深さ、優しさの下位尺度が、協調性尺度（Cloninger et al., 1993；木島他, 1996）には、社会的受容性、共感、協力、同情心、純粋な良心の下位尺度がある。さらに、Markus & Kitayama (1991)の見方に基づいて、相互協調的自己観を反映する相互協調性を測定する尺度も作成されている（高田, 1999）。しかし、これらの既存の尺度が協調性概念を過不足なく捉えているかどうかは明確ではない。また、本研究で協調性概念に含めた協調的な対人交渉方略をとる傾向は、質問紙以外の方法で測定されている。質問紙法で協調性について検討するためには、既存の協調性尺度の内容を再検討するとともに、本研究における上記の協調性概念の定義をふまえて、改めて項目を収集、考案して質問紙を作成し、これを用いた調査の結果をもとに、多面的な新たな協調性尺度を作成することが望ましいと判断した。協調的な対人交渉方略をとる傾向についての項目等を追加する必要もある。

そこで本研究では、既存の協調性尺度やその下位尺度の項目等の内容と本研究における協調性概念の定義をもとに協調性に関する質問紙項目を取

集、考案し、これを用いた大学生男女を対象とする調査を行い、その結果をもとに、協調性のさまざまな側面を捉えることができる新たな多面的協調性尺度を開発する。そして、複数の尺度との関係からその構成概念妥当性を検討するとともに、協調性のさまざまな側面はどのような特性や経験と関連するかを検討するため、協調性と対人関係のあり方、攻撃性、いじめ加担経験、社会的望ましさ、性別、専攻（文系か理系か）、大学での所属サークル、ボランティア経験との関係を検討する。また、尺度の再検査信頼性についても検討する。

方法

予備調査

NEO-PI-R日本語版（下仲他, 1999）の調和性尺度の下位尺度、主要5因子性格検査（村上・村上, 1997）の協調性尺度、TCI日本語版（木島他, 1996）の下位尺度と、協調性を表していると考えられる項目を含むENCOREs（藤本・大坊, 2007）の項目、およびCaspi & Shiner (2006)のAgreeablenessの定義（Agreeablenessの高さは温かさ、思いやり、共感性、寛大、他者養護、親切、向社会性を表し、Agreeablenessの低さは攻撃性、粗野、意地悪、頑固、傲慢、皮肉屋、操作性等を示すとしている）を参考にして、協調性に関する73項目を第1著者が考案、収集し、著者のうち4名の研究者と教育系の大学生の計13名を対象に、この73項目のそれぞれについて、次のいずれであるかの評定を求める調査を行った。協調性を表している（4）、協調性と関係が深い（3）、協調性と少し関係がある（2）、非協調性を表している（-4）、非協調性と関係が深い（-3）、非協調性と少し関係がある（-2）、協調性も非協調性ともほとんど関係がない（0）（評定段階間の違いをなるべく的確に表せるように数値化した）。

予備調査で協調性との関係が比較的高いと判断された35項目を残すと同時に、残りの項目の一部（6項目）も念のためそのままか、表現を一部変更して残し、協調的な対人交渉方略をとる傾向を表す項目と、協調性を表すと考えられる他の新たな項

目を考案して加え、82項目からなる協調性質問紙を作成した。

調査1

2011年7月、大学生男子181名、女子215名、計396名を対象に、上記の82項目の協調性質問紙を用いた調査を実施した。82項目のそれぞれについて、「全然当てはまらない」から「よく当てはまる」までの5件法で回答を求めた。

82項目について、主成分分析を行った。第1成分は協調性を表していると考え、第1成分の負荷量が.35以上の56項目について、最尤法、プロマックス回転を用いた探索的因子分析を行った。固有値の減衰状況(14.55、2.77、1.82、1.33、1.15)から因子数を3、4、5とする場合について検討したところ、因子数3では、第1因子は協調的な対人方略をとる傾向、協調的信念(「人ととの和を重んじる」など)、他者尊重などを表し、第2因子は非協調的な傾向と他者に協力する傾向、第3因子は他者に合わせる傾向を表していることが示唆された。因子数4では、非協調的傾向を表す項目のうち、「人に合わせるより自分が勝つ方が大事だ」や「人の意見は聞かない」等、他者軽視を表す項目の負荷量が高い第4因子が抽出された。因子数5では、因子数3の場合の第1因子の負荷量が高かった項目のうち、協調的信念を表す項目は第1因子の負荷量が高く、協調的な対人方略をとる傾向と他者尊重を表す項目は第2因子の負荷量が高いという結果となった。

因子数3、4、5とする場合の3つの結果で、いずれも当該因子の負荷量が.35未満の項目と類似内容の項目を削減し、38項目を選択した。

調査2

2011年12月から2012年1月にかけて、大学生男子237名、女子260名、計497名(平均年齢19.80歳)を対象として、調査1の結果をもとに選択した(a)協調性38項目と、(b)Big Five尺度(和田, 1996)の調和性尺度、(c)相互独立的一相互協調的自己観尺度(高田, 1999)の個の認識・主張、他者への親和・順応、評価懸念尺度、(d)多次元的共感性尺度(登張, 2003)の共感的関心、個

人的苦痛尺度、(e)価値志向性尺度(酒井・久野, 1997)の「社会」尺度、(f)親和動機尺度(杉浦, 2000)の親和傾向、拒否不安尺度、(g)社会的自己制御尺度(原田・吉澤・吉田, 2008)の感情・欲求抑制尺度、(h)内的作業モデル尺度(戸田, 1988)の安定、アンビバレント、回避尺度、(i)仲間関係発達尺度(黒沢・森・寺崎・大場・有本・張替, 2002)のピア、ギャングチャム、ピア・プレッシャー尺度、(j)攻撃性尺度(磯部・菱沼, 2007)の外顕性攻撃、関係性攻撃尺度、(k)いじめ加担経験尺度(澤田, 2009)、(l)バランス型社会的望ましさ尺度(谷, 2008)の印象操作尺度を用いた質問紙調査を実施した。協調性尺度の構成概念妥当性検討のために質問紙調査に含めたのは、上記の尺度のうち、調和性尺度(和田, 1996)、他者への親和・順応(高田, 1999)、共感的関心(登張, 2003)、価値志向性「社会」(酒井・久野, 1997)、親和傾向(杉浦, 2000)、感情・欲求抑制(原田他, 2008)尺度である。(h)内的作業モデル尺度(戸田, 1988)と(i)仲間関係発達尺度(黒沢他, 2002)は、対人関係のあり方を測定するために質問紙に含めた。

質問紙は2種類(AとB)あり、(a)(j)(k)はAとBの両方に、(b)(c)(d)(h)は質問紙Aに、(e)(f)(g)(i)(l)は質問紙Bに含まれている。質問紙Aには272名(男子117名、女子155名)が、質問紙Bには225名(男子120名、女子105名)が回答した。

(a)(c)(d)(e)(f)(g)(j)(l)は(a)に合わせて「全然当てはまらない」—「よく当てはまる」の5件法、(b)は「全く当てはまらない」—「非常に当てはまる」の7件法、(h)は「全く当てはまらない」—「非常に当てはまる」の6件法、(i)は「思わない」—「そう思う」の4件法で回答を求めた。(k)はいじめ経験に関する10項目について経験がない場合に1、ある場合に2に○をすよう求め、経験があるとされた項目の数を合計した(得点範囲は0-10である)。

質問紙AとBの両方に、所属学部・学科、所属サークル・委員会、およびボランティア経験について聞く質問があり、所属サークル等については活動内容と熱心に参加しているか、リーダーをし

ているかについて尋ねた。ボランティア経験についてはボランティア経験の有無を尋ね、経験ありの場合はその内容の記述と、なぜその活動をしたかの理由について6つの選択肢から選ぶことを求めた。

[尺度の構成概念妥当性に関する仮説]

協調性と訳される場合もあるビッグファイブの Agreeableness 因子を測定する尺度である調和性尺度 (和田, 1996)、他者との対立の回避や協調を重視する傾向を測定する他者への親和・順応尺度 (高田, 1999)、協調性の一要素とされる (Caspi & Shiner, 2006; Cloninger et al., 1993) 共感性のうち、他者志向的共感性を測定する共感的関心尺度 (登張, 2003)、他者を愛し共感し献身する価値を志向する傾向を測定する「社会的」価値志向性尺度 (酒井・久野, 1997) は尺度の内容から、非利己的な協調性とは正の関係にあることが予測される。また、協調性の起源について検討した登張 (2010) によると、協調性は親和性や自己調整に関連する気質と関係があることが示唆された。したがって、親和性を測定できると考えられる親和傾向尺度 (杉浦, 2000) と、自己調整傾向を測定できると考えられる社会的自己制御尺度 (原田他, 2008) の感情・欲求抑制尺度は、協調性と正の関係をもつと予測できる。

上記の尺度以外に測定尺度に含めた個の認識・主張尺度 (高田, 1999)、評価懸念尺度 (高田, 1999)、個人的苦痛尺度 (登張, 2003)、拒否不安尺度 (杉浦, 2000)、内的作業モデル尺度 (戸田, 1988) と仲間関係発達尺度 (黒沢他, 2002)、攻撃性尺度 (磯部・菱沼, 2007)、いじめ加担経験尺度 (澤田, 2009)、印象操作尺度 (谷, 2008)、性別、専攻、所属サークル等、ボランティア経験と協調性下位尺度との関係については、探索的に検討する。

調査3

大学生男子68名、女子37名計105名 (平均年齢18.94歳) を対象に、調査2で用いたのと同じ協調性に関する38項目を用いた質問紙調査を2012年5月と6月に2度実施した。回答法は調査2と同じ5件法である。

結果

1. 因子分析の結果と多面的協調性尺度の作成

調査2の大学生497名のデータで、協調性38項目について、最尤法の因子分析を行った。いずれも協調性に関連する因子が抽出されると予測されることから、斜交回転のプロマックス回転を選択した。固有値の減衰状況 (9.68、2.25、1.50、0.81、0.74) から因子数3、4、5とする場合について検討すると、因子数5では、第5因子の負荷量が4以上の項目が1項目だけであった。因子数4では、第1因子は協調的な対人方略をとる傾向等、第2因子は非協調的傾向等、第3因子は相手に合わせる傾向等、第4因子は他者に協力する傾向等を表すことが示唆された。因子数3では、第1因子は協調的な対人方略をとる傾向と協力志向を表す因子となり、第2因子と第3因子は因子数4の場合とほぼ同じであった。協調的な対人方略をとる傾向と他者に協力する傾向は、区別できる傾向であり、別々の下位尺度とする方が有用であると判断し、4因子解をとることとした。

当該の因子負荷量が.35未満の項目と、複数の因子の負荷量が同等となる項目、類似内容の項目、表現が極端な項目を削除した残りの25項目についての結果をTable 1に示した。

第1因子の負荷量が高かったのは、協調的対人交渉方略をとる傾向を示す項目として考案した項目⁵⁾、他者の意見の尊重、気持ちのコントロールを表す項目で、いずれも協調的な問題解決を目指し、それに資する傾向を表すと考えられることから、第1因子は協調的問題解決因子と命名した。第2因子の負荷量が高かったのは他者に合わせる傾向を表す項目、第3因子の負荷量が高かったのは、非協調的であることを示す項目、第4因子の負荷量が高かったのは、他者に協力する傾向を表す項目であった。第2因子と第3因子、第4因子は含まれる項目の内容から、それぞれ調和志向因子、非協調志向因子、協力志向因子と命名した。因子間の相関はいずれも有意であるが ($ps < .001$)、第1因子と第3因子の間には負のかなり高い相関がみられ ($r = -.62$)、第1因子と第4因子の間には

正のかなり高い相関がみられた ($r=.58$)。第1、第2、第3、第4因子をもとに、それぞれ協調的問題解決尺度 (10項目)、調和志向尺度 (6項目)、非協調志向尺度 (5項目)、協力志向尺度 (4項目) を作成した。α係数はそれぞれ.79、.80、.72、.70であった。この4下位尺度からなる尺度を、協調性のさまざまな側面を表す尺度と言う意味で、多面的協調性尺度と命名した。

2. 多面的協調性下位尺度と調和性、相互協調性、共感性、社会的価値志向性、親和動機、感情・欲求抑制との関係

多面的協調性尺度の構成概念妥当性を検討する

ために、仮説で協調性と正の相関をもつと予測された調和性尺度 (和田, 1996)、他者への親和・順応尺度 (高田, 1999)、共感的関心尺度 (登張, 2003)、社会的価値志向性尺度 (酒井・久野, 1996)、親和傾向尺度 (杉浦, 2000)、感情・欲求抑制尺度 (原田他, 2008) と多面的協調性4下位尺度との相関を検討すると、協調的問題解決尺度と調和志向尺度、および協力志向尺度は調和性、他者への親和順応、共感的関心、社会的価値志向性、親和傾向、感情・欲求抑制と有意な正の相関を示したのに対し、非協調志向尺度はこれらの尺度と有意な負の相関を示した (Table 2)。

Table 2には、多面的協調性下位尺度と個の認

Table 1 多面的協調性尺度の因子分析

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
相手が納得するようにきちんと説明する	.60	-.09	.03	-.01	.31
他者と意見が異なるとき両者が歩み寄れるような解決案を考える	.59	-.01	.04	.04	.35
意見が対立した相手との合意を得られるよう努力する	.56	.01	.10	.16	.37
どんな人に対してでもなるべく相手の話を聞く	.54	-.02	-.09	.07	.41
失敗してみんなに迷惑をかけたことに気づいたら素直に謝れる	.52	-.04	-.07	-.09	.26
自分と相手のどちらにとっても良い方法を考える	.52	.01	-.06	-.07	.27
自分とは全く違う生き方をしている人とも仲良くなれる	.50	-.02	.10	.11	.26
その場の状況に合わせて自分の気持ちをうまくコントロールする	.49	.10	.15	.01	.21
自分とは違う考えの人の話は聞きたくない	-.44	.09	.32	.16	.34
相手の意見をできるだけ尊重する	.41	.27	.02	-.01	.29
人の意見に合わせる事が多い	-.19	.89	.05	-.02	.69
なるべく人に合わせようとしている	-.18	.77	-.01	.02	.55
相手のペースに合わせる	.15	.58	-.03	-.07	.40
所属するグループの意向に合わせてようとする	.04	.53	-.12	.04	.40
もめごとが起こらないようにしている	.19	.47	.04	-.01	.28
相手との関係が悪くならないように配慮して行動する	.20	.44	-.11	.10	.44
人と気持ちを分かち合いたいとは思わない	.09	.05	.83	-.09	.64
他の人の気持ちを理解したいとは思わない	.02	-.02	.67	-.13	.54
人に合わせるより自分が勝つことが大事だ	.10	-.10	.49	.07	.21
手伝いを頼まれても断ることが多い	.01	.02	.48	-.03	.23
人の意見は聞かない	-.29	-.11	.38	.18	.33
みんなで協力して何かをやり遂げるのが好きだ	-.05	-.09	-.04	.87	.69
みんなで何かをやるときには進んで協力する	.31	-.07	-.03	.45	.45
人間関係を第1に考えて行動する	.03	.29	-.02	.43	.40
個人プレーよりチームプレーに徹する方だ	.05	.12	.05	.38	.19
負荷量平方和	5.88	1.98	0.87	0.77	
寄与率 (%)	23.54	7.92	3.47	3.06	
累積寄与率 (%)	23.54	31.45	34.92	37.97	
回転後の負荷量平方和	4.85	3.64	4.14	3.62	
因子間相関	第1因子	1.00			
	第2因子	.30	1.00		
	第3因子	-.62	-.40	1.00	
	第4因子	.58	.39	-.48	1.00

注) 大学生男子237名, 女子260名, 計497名のデータ

識・主張、評価懸念、個人的苦痛、拒否不安、内的作業モデル尺度、仲間関係発達尺度、攻撃性尺度、いじめ加担経験尺度、印象操作尺度との相関も示している。協調的問題解決と調和志向では、個の認識・主張、評価懸念、個人的苦痛、拒否不安尺度との関係が全く異なっており、協調的問題解決は個の認識・主張と正の関係、個人的苦痛とは負の関係、評価懸念、拒否不安とは有意な相関を示さないのに対し、調和志向は個の認識・主張とは負の相関、個人的苦痛、評価懸念、拒否不安とは正の相関を示した。協力志向は個の認識・主張とは協調的問題解決と同様に正の相関を示すが、評価懸念、拒否不安とは調和志向と同様に正の相関を示した。なお、非協調志向は個の認識・主張とは正の関係、評価懸念とは負の関係を示し、個人的苦痛、拒否不安とは有意な相関を示さない

という結果であった。

3. 多面的協調性下位尺度と対人関係のあり方、攻撃性、いじめ加担経験、社会的望ましさと の関係

多面的協調性下位尺度と内的作業モデル下位尺度との関係では、安定は協調的問題解決、協力志向と正の相関、非協調志向とは負の相関を示し、調和志向とは有意な相関を示さなかった。アンビバレントは調和志向と正の相関、協調的問題解決と負の相関を示し、協力志向、非協調志向とは有意な相関を示さなかった。また、回避は非協調志向と正の相関、協力志向、協調的問題解決、調和志向と負の相関を示した。

多面的協調性下位尺度と仲間関係発達尺度下位尺度との関係では、ピア（違いを認める仲間関係）

Table 2 多面的協調性下位尺度と共感性、調和性、攻撃性等との相関

	項目数	α 係数	協調的問題 解決 (10項目)	調和志向 (6項目)	非協調志向 (5項目)	協力志向 (4項目)
協調的問題解決	10	.79	1.00			
調和志向	6	.80	.31***	1.00		
非協調志向	5	.72	-.49***	-.38***	1.00	
協力志向	4	.70	.51***	.40***	-.44***	1.00
Big 5調和性	12	.82	.42***	.32***	-.32***	.41***
共感的関心	13	.88	.38***	.25***	-.54***	.38***
他者への親和・順応	6	.61	.21**	.59***	-.36***	.42***
親和傾向	9	.85	.48***	.33***	-.47***	.60***
価値志向性 [社会]	12	.82	.63***	.41***	-.63***	.65***
感情・欲求抑制	9	.73	.60***	.28***	-.41***	.29***
個人的苦痛	6	.69	-.32***	.23***	.00	-.07
個の認識・主張	4	.73	.36***	-.29***	.13*	.19**
評価懸念	4	.69	-.02	.43***	-.25***	.18**
拒否不安	9	.67	.02	.45***	-.11	.26***
安定尺度	6	.86	.47***	.04	-.14*	.48***
アンビバレント	6	.77	-.17**	.22***	-.05	-.08
回避	6	.72	-.22***	-.16**	.46***	-.42***
ピア	4	.73	.52***	.18**	-.39***	.39***
ギャングチャム	5	.64	.06	.24***	-.01	.23**
プレッシャー	5	.60	-.10	.28***	.07	.05
外顕性攻撃	12	.85	-.21***	-.26***	.35***	-.15**
関係性攻撃 ^a	6	.67	-.29***	-.03	.20***	-.07
いじめ加担経験			-.15**	-.00	.21***	.06
偏相関 ^b			-.06	.03	.13	.06
印象操作	12	.66	.32***	.21**	-.29***	.15*

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

注) a 関係性攻撃尺度は全7項目の内的整合性が低かったため ($\alpha = .51$)、 α 係数を下げている1項目を減らし、6項目を用いた ($\alpha = .67$)。

b いじめ加担経験と協調性下位尺度との印象操作を制御変数とする偏相関。

は協調的問題解決、協力量向、調和志向と正の相関、非協調志向と負の相関を示した。ギャングチャム（群れる仲間関係）は調和志向、協力量向と正の相関を示し、協調的問題解決、非協調志向とは有意な相関を示さなかった。ピア・プレッシャー（仲間への同調圧力を感じる）は、調和志向と正の相関を示したが、協調的問題解決、協力量向、非協調志向とは有意な相関を示さなかった。

多面的協調性下位尺度と攻撃性尺度下位尺度との関係では、外顕性攻撃は非協調志向と正の相関、調和志向、協調的問題解決、協力量向と負の相関を示した。一方、関係性攻撃は非協調志向と正の相関、協調的問題解決と負の相関を示したが、協力量向、調和志向とは有意な相関を示さなかった。協調性下位尺度といじめ加担経験尺度との関係は、非協調志向とは正の相関、協調的問題解決とは負の相関を示し、協力量向、調和志向とは有意な相関を示さなかった。

多面的協調性下位尺度と印象操作尺度との関係は、協調的問題解決、調和志向、協力量向とは正の相関、非協調志向とは負の相関を示した。印象操作尺度と共に用いた尺度（社会的価値志向性、親和傾向、拒否不安、感情・欲求抑制、外顕性攻撃、関係性攻撃、いじめ加担経験）については、印象操作尺度を制御変数とする偏相関も調べたところ、いじめ加担経験尺度と協調性下位尺度との関係は、偏相関にすると有意でなくなったが、その他の尺度と協調性下位尺度との関係は、偏相関でもゼロ次相関でもほとんど違いはみられなかった。Table 2には、いじめ加担経験と協調性下位尺度との印象操作を制御変数とする偏相関も示した。

4. 多面的協調性下位尺度と性別、専攻学部・学科、所属サークル、ボランティア活動との関係

専攻学部・学科への回答をもとに、文系と理系に分類した。文系は女性が多く、理系は男性が多いことが予測されるが、そのどちらの要因が協調性の高さにより強い影響を与えるかを検討する必要がある。そこで、多面的協調性4下位尺度の得点について、それぞれ性別と文系理系を要因とする2要因分散分析を行った（Table 3）。それによ

ると、協調的問題解決は、文系理系の主効果が有意で、文系が理系より協調的問題解決の得点が高かった。調和志向は、性別と文系理系の交互作用が有意で、文系は女性の方が男性より調和志向が高いが、理系では男性が女性より調和志向が高かった。非協調志向は、性別の主効果が有意で、男性が女性より非協調志向が高かった。協力量向は、性別、文系理系の主効果も、交互作用も有意ではなかった。

所属するサークル・委員会と協調性下位尺度との関係については、まず所属サークル等の内容についての回答から、①スポーツ、②音楽系、③国際貢献またはボランティア、④勉強会、⑤その他文化系サークル、⑥学祭委員会または生協委員会、⑦内容不明、⑧サークル記入なしに分類し、多面的協調性下位尺度の得点について分散分析を行った（Table 4）。それによると、活動内容の主効果は非協調志向と協力量向で有意で、非協調志向は、サークル記入なし群とスポーツ系サークル群が音楽系サークル群より有意に高かった。協力量向は、学祭委員会または生協委員会群と音楽系サークル群、スポーツ系サークル群がサークル記入なし群とその他文化系サークル群より高かった。協調的問題解決と調和志向は活動内容の主効果が有意でなかった。

Table 4には、サークルに熱心群と熱心なサークルなし群、サークルのリーダー群と非リーダー群、ボランティア経験あり群となし群の協調性下位尺度の平均値の差の検定結果も示している。サークル熱心群は熱心なサークルなし群より、協調的問題解決と協力量向が高く、非協調志向が低かった。また、サークルのリーダー群は非リーダー群より、協調的問題解決尺度の得点が高かった。そして、ボランティア経験群はボランティア経験なし群よりも、協調的問題解決と協力量向が高かった。

ボランティア活動の内容による多面的協調性下位尺度得点の違いについては、木村・登張・大山・首藤・名尾（2013）が生活・学習支援、話し相手・遊び相手、イベントサポート、環境美化、募金活動、不明の6つに分類して検討したが、有意差はみられなかった。本研究では活動内容の分類の仕

Table 3 多面的協調性下位尺度得点の性別と文系理系を要因とする2要因分散分析

下位尺度		平均値		性別効果 F	文系理系効果 F	交互作用 F
		文系	理系			
協調的問題解決	男	38.32	37.81	1.40	4.36*	1.29
	女	39.55	37.84			
調和志向	男	21.95	22.60	0.04	1.58	7.97**
	女	23.19	21.52			
非協調志向	男	10.91	11.43	33.29***	2.09	0.04
	女	9.17	9.56			
協力志向	男	14.50	14.68	0.50	0.10	0.06
	女	14.80	14.82			

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

注) 平均値が有意に高かった群の得点を網掛けで示した。

文系は男子133、女子214、計347名、理系は男子104、女子45、計149名である。

Table 4 多面的協調性尺度下位尺度と所属サークル・委員会活動、ボランティア活動との関係

	N	協調的問題解決	調和志向	非協調志向	協力志向
所属サークル・委員会の活動内容					
①スポーツ系	142	38.60	22.06	10.55	15.14
②音楽系	55	40.17	23.49	8.91	15.64
③国際貢献またはボランティア	43	39.58	22.62	9.33	14.98
④勉強会	6	36.67	23.50	12.00	14.00
⑤その他文化系サークル	43	39.04	22.74	9.95	13.49
⑥学祭委員会または生協委員会	17	40.53	22.53	8.53	16.47
⑦内容不明	2	40.00	23.00	10.00	16.00
⑧サークル記入なし	192	37.97	22.61	10.53	14.12
活動内容の主効果 F(7,492)		1.97	0.86	3.50**	4.65***
多重比較				①⑧>②	⑥②①>⑧⑤
サークルに熱心	210	39.41	22.64	9.71	15.24
熱心なサークルなし	290	38.19	22.52	10.48	14.28
平均値の差の検定 t(498)		2.66**	0.34	-2.76**	3.79***
サークルのリーダー	37	40.33	22.24	9.84	15.14
サークルのリーダーではない	463	38.57	22.60	10.18	14.65
平均値の差の検定 t(498)		2.03*	-0.53	-0.64	0.98
ボランティア経験あり	143	39.98	22.46	9.70	15.26
ボランティア経験なし	329	38.14	22.65	10.30	14.44
平均値の差の検定 t(470)		3.69***	-0.48	-1.91	2.81**
ボランティア活動の内容					
①障害児(者)等との交流	26	41.15	22.96	8.69	15.46
②学習ボランティア	25	41.28	22.60	9.76	16.08
③ゴミ・清掃	20	41.05	22.45	9.80	15.60
④子どもと遊ぶ・保育	17	38.06	23.71	10.35	15.65
⑤災害ボランティア	13	36.31	22.00	10.31	14.62
⑥募金・物資援助	8	42.38	23.13	10.00	14.75
⑦老人ホーム等	6	36.17	21.00	9.00	14.50
⑧行事	5	38.40	21.00	12.60	13.00
⑨その他	10	40.00	19.20	9.80	13.80
⑩内容記入なし	13	40.46	23.38	8.92	15.54

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

注) 人数(N)と活動内容の主効果、平均値の差の検定の自由度は、尺度によって欠損値の数が違うために若干異なる。Table 4には、最も欠損値の少ない協力志向尺度の人数と自由度を示した。平均値が有意に高かった群の得点を網掛けで示した。

方を若干変更し、障害児（者）等との交流（26名）、学習ボランティア（25名）、ゴミ・清掃（20名）、子どもと遊ぶ・保育（17名）、災害ボランティア（13名）、内容記入なし（13名）、募金・物資援助（8名）、老人ホーム等（6名）、行事（5名）等に分類した。人数が少ないため、検定は行っていないが、協調的問題解決が高かったのは募金・物資援助群（ $M=42.38$ ）、学習ボランティア群（ $M=41.28$ ）、障害児（者）等との交流群（ $M=41.15$ ）などで、調和志向が高かったのは子どもと遊ぶ・保育群（ $M=23.71$ ）、募金・物資援助群（ $M=23.13$ ）など、非協調志向が低かったのは障害児（者）等との交流群（ $M=8.69$ ）、老人ホーム等群（ $M=9.00$ ）などであった。協力志向が高かったのは学習ボランティア群（ $M=16.08$ ）、子どもと遊ぶ・保育群（ $M=15.65$ ）、ゴミ・清掃群（ $M=15.60$ ）などであった。

ボランティア活動をした理由についての回答は、「人の役に立ちたいと思った」が51名、「貴重な体験になると思った」が42名、「新たな出会いを通して自分を高めたいと思った」が8名、「大学の単位になる」が3名、「就職活動に役立つ」が2名、その他が12名であった。このうち協調的問題解決が最も高かったのは「自分を高めたい」群であった（ $M=42.13$ ）。

5. 多面的協調性尺度の再検査信頼性の検討

調査3の1回目と2回目で用いられた多面的協調性4下位尺度の相関（再検査信頼性）を検討したところ、協調的問題解決は.69、非協調志向は.72、調和志向は.78、協力志向は.80であった（ $ps<.001$ ）。多面的協調性尺度の再検査信頼性は比較的高かったと言える。

考察

1. 多面的協調性尺度の作成

大学生対象の調査、主に調査2の因子分析結果をもとに、協調的問題解決、調和志向、非協調志向、協力志向の4下位尺度からなる多面的協調性尺度が作成された。協調的問題解決は他者との間で対立する問題が起きたときに自分と相手の両者

にとって良いような協調的問題解決をする傾向と他者受容の傾向、調和志向は他者に合わせる傾向、協力志向は他者に協力する傾向を表している。協調的問題解決をする傾向を表す項目と他者受容の傾向を表す項目が一つの因子としてまとまるのは、その二つの傾向が強い関連をもつことを示していると考えられる。非協調志向は非協調的な行動をとる傾向を表しており、協調的問題解決と協力志向の両方とやや高い負の関係をもつが、因子数を変えた分析でもどちらかに含まれるのではなく、非協調的項目は堅固にまとまる結果となった。このため、因子分析の結果を尊重して非協調志向尺度としてまとめた。

2. 多面的協調性下位尺度の妥当性と信頼性の検討

協調的問題解決と調和志向、協力志向は、協調性との関連が深いと考えられる調和性（和田，1996）、他者への親和・順応（高田，1999）、共感的関心（登張，2003）、社会的価値志向性（酒井・久野，1997）、親和傾向（杉浦，2000）、感情・欲求抑制（原田他，2008）と正の相関を示し、非協調志向はこれらと負の相関を示し、協調的問題解決、調和志向、協力志向は協調性の一面を、非協調志向は協調性の低さを表していることが示され、多面的協調性尺度の構成概念に関する仮説は支持された。

多面的協調性下位尺度と個の認識・主張・評価懸念（高田，1999）、拒否不安（杉浦，2000）、個人的苦痛（登張，2003）との関係から、4下位尺度の違いも示唆された。特に、協調的問題解決と調和志向の違いが明確となった。協調的問題解決の傾向が高い人は協調的であるとともに個として行動し、主張する傾向もあり、自己が確立し、自信を持っているのに対し、調和志向の高い人は自分に自信がなく、他者の評価や拒否されることを恐れる傾向があることが示唆された。一方、非協調志向の傾向が高い人は他者の評価をあまり気にせず、個の認識や自己主張の傾向もややみられることが示唆された。しかし、協調的問題解決と協力志向、調和志向と協力志向との違いは十分明確になったとは言えない。下位尺度の違いをさらに明らかにするためには、さらに他の尺度との関係

をみる必要がある。

多面的協調性下位尺度の α 係数はいずれも.70以上であり、内的整合性は比較的高かったと言える。また、尺度の再検査信頼性についても、確認することができた。

なお、本研究では主に調査2の因子分析結果をもとに尺度を作成したが、調査1の因子分析結果は類似しているものの若干異なるという問題点もあった⁶⁾。別の集団でも調査を行い、因子的妥当性をさらに検討する必要がある。

3. 協調性下位尺度と対人関係のあり方との関係

協調的問題解決と協力志向は、安定した内的作業モデル、違いを認める仲間関係と比較的強い関係にあるのに対し、調和志向はアンビバレントな内的作業モデル、群れる仲間関係、仲間と同調しなければならぬと感じる仲間関係と関連があることが明らかになった。協力志向も群れる仲間関係と関連がある。一方、非協調志向は回避的な内的作業モデルと比較的強い関係があるとともに、違いを認める仲間関係とは負の関係にあり、非協調志向の高い人は、自分とは異なる他者を認める気持ちが少なく、他者との親密な関係を回避する傾向にあることが示唆された。対人関係のあり方との関係は、協調的問題解決と協力志向は比較的類似しているが、調和志向は上記の2尺度とは異なる特徴をもち、非協調志向はさらに異なる特徴をもつことが示唆された。

4. 協調性下位尺度と攻撃性、いじめ加担経験、印象操作との関係

殴る、蹴るなど暴力的な外顕性攻撃は協調的問題解決、調和志向、協力志向と負の関係、非協調志向と正の関係を示し、協調性の高い人は全般的に身体的攻撃を示さない傾向にあることが明らかになったが、言葉や無視などを用いる間接性攻撃と調和志向、協力志向の間には関連がみられなかった。調和志向や協力志向の高い人は、仲間が間接性攻撃を用いる場合に同調したり、協力したりすることがあるのかもしれない。

協調的問題解決、調和志向、協力志向は印象操作と正の関係にあり、社会的望ましき反応と関連

があることがわかった。いじめ加担経験と協調性下位尺度との関係は、ゼロ次相関では有意な関係がみられたが、印象操作を制御変数とする偏相関では有意でなくなった。協調性の高い人は、いじめに加担するような行動がよくないと認識しているが、実際には行う場合もあるのかもしれない。

5. 多面的協調性下位尺度と性別、大学での専攻（文系か理系か）の関係

協調性下位尺度の性別と文系理系の区別を要因とする2要因分散分析の結果から、協調的問題解決は文系学生が理系学生より高い傾向にあり、調和志向は文系女性が高く、理系女性が低い傾向にあること、非協調志向は男性が女性より高い傾向にあることがわかった。一方、協力志向には性別や専攻による違いはみられなかった。性別には性別社会化の影響など、文化や生後の経験などの要素も含まれている可能性があるが、大学での専攻などと比べると、生物学的な要素が強いと考えられる。したがって、協調性の各側面の中で、非協調志向は生まれつきの生物学的な違いをより強く反映しているのかもしれない。この点については、今後、他の経験や気質など、さまざまな変数との関連も併せてさらに検討することが必要である。

6. 多面的協調性下位尺度と所属サークル・委員会との関係

協調的問題解決はサークル・委員会活動に熱心な群とサークル等のリーダーをしている群が高かったが、所属サークル・委員会の活動内容との関連はみられなかった。一方、協力志向はサークル等の活動に熱心な群が高いだけでなく、活動内容による違いもみられ、委員会や音楽系サークル、スポーツ系サークルに参加する群は高い傾向がみられた。逆に、文化系サークル群とおそらくサークル活動をほとんどしていないサークル記入なし群は協力志向が相対的に低いという結果であった。もともと協力志向の高い人が委員会や音楽系サークル、スポーツ系サークル等の活動に参加する傾向にあるのかもしれないが、それらの活動を体験することによって協力志向や協力的行動傾向が高まったとも考えられる。今後は、そうした活

動をする前と後で比較する、インタビューを行うなど、研究法を考え、因果関係をさらに詳細に検討する必要がある。

音楽系サークル群と委員会群は協力志向が高く、非協調志向が低いという一貫した結果であったのに対し、スポーツ系群は、協力志向は高いが非協調志向も相対的に高いという傾向がみられた。団体スポーツと個人スポーツの違いなどもあるかもしれない。今後、さらに検討する必要がある。

なお、調和志向は所属サークル等との関係がみられなかった。そうした経験とは別の要因（たとえば評価懸念、拒否不安の傾向など）との関連が深いと考えられる。

7. 多面的協調性下位尺度とボランティア活動との関係

ボランティア経験のある人は経験がない人より協調的問題解決と協力志向が高かった。ボランティアを行う人はもともと協力志向が高い可能性があるし、ボランティア活動自体にいろいろな人と協調して問題解決をするという状況が含まれていて、ボランティア活動を通して協調的問題解決をする傾向が高まったりそのスキルが高まったりするのかもしれない。因果関係については、今後検討する必要がある。

ボランティア活動の内容による協調性下位尺度得点の違いについては、災害ボランティア群の協調性は特に高いという傾向はみられず、比較的高かったのは募金・物資援助群、障害児（者）との交流群、学習ボランティア群などであった。人数が少ないこともあり、今回の結果からは明確な傾向はみられなかったと言える。どの活動にも協力や協調的問題解決等の要素が含まれているのかもしれないし、活動内容の決定には状況要因や協調性以外の他の特性が関連しているのかもしれない。協調性のさまざまな側面とボランティア活動との関係については、今後さらに検討する必要がある。

まとめと今後の課題

本研究では、大学生男女を対象とした調査をもとに、協調性のさまざまな側面を別々に測定することのできる新たな多面的協調性尺度を作成した。多面的協調性下位尺度とさまざまな特性との関係の検討から、尺度の構成概念妥当性は支持され、各尺度の違いも明らかになったが、協調的問題解決と協力志向、協力志向と調和志向との違いについてはさらに詳細に検討する必要がある。また、多面的協調性下位尺度とさまざまな経験との関係を検討したところ、協調的問題解決と協力志向の得点は学生時代のサークル活動やボランティア活動の経験と関連していた。今後は、大学生以外の年齢集団でも調査を行って因子の妥当性をさらに検討し、発達の研究にも使用できる尺度にするとともに、協調性のさまざまな側面がそれぞれどのように発達し、その発達にどのような要因が影響を与えるのか、どのようにすれば協調性を高めることができるのかを検討していきたい。

注

- 1) 生体を構成する諸部分が相互に調整を保った活動をするということの定義もあるが、ここではその意味では用いない(意味的には関連があるので省略した(広辞苑第6版)。
- 2) Goldberg (1992) は、Agreeablenessを示す10形容詞として、agreeable, cooperative, kind, sympathetic, warm, trustful, considerate, pleasant, helpful, generousを示している。
- 3) 性格(character)は洞察学習と自己概念の再組織化によって発達して成人期に成熟し、個人的社会的有効性に影響を与えるとされている(Cloninger et al., 1993)。
- 4) 英訳語としてcooperativenessが示されている。なお、英語で「協調(または協力)」を表すのはcooperation、「協調的(または協力的)」を表すのはcooperativeである(ジーニアス英和辞典第4版)。
- 5) 当初、協調的対人交渉方略をとる傾向を表す

として考案した項目はさらに多かったが、このうち協調性との関係が弱い項目は調査1の主成分分析の結果省かれたと考えられる。

6) 調査1と調査2の結合データを用いた因子分析も行ったが、その結果は調査2の因子分析結果とほぼ同じであった。

引用文献

- Caspi,A., & Shiner,R.L. (2006). Personality development. In N.Eisenberg (Ed.) *Handbook of child psychology: Volume three: Social, emotional, and personality development*. 6th ed. New York: Wiley. Pp.300-365.
- Cloninger,C.R., Svrakic,D.M., & Przybeck,T.R. (1993). Psychological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, **50**, 975-988.
- Costa,Jr.,P.T., & McCrae,R.R. (1992). *Neo-PI-R professional manual: Revised NEO Personality Inventory (NEO-PI-R) and NEO Five-factor Inventory (NEO-FFI)*. Odessa,FL, Psychological Assessment Resources. (下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山緑 (1999). 日本語版NEO-PI-R NEO-FFI使用マニュアル 東京：東京心理 (株)).
- 藤本学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, **15**, 347-361.
- Goldberg,L.R. (1992). The development of markers for the Big-Five factor structure. *Psychological Assessment*, **4**, 26-42.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2008). 社会的自己制御 (Social Self-Regulation) 尺度の作成—妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連 パーソナリティ研究, **17**, 82-94.
- 磯部美良・菱沼悠紀 (2007). 大学生における攻撃性と対人情報処理の関連—印象形成の観点から パーソナリティ研究, **15**, 290-300.
- 木島伸彦・斎藤衣衣・竹内美香・吉野相英・大野裕・加藤元一郎・北村俊則 (1996). Cloningerの気質と性格の7次元モデルおよび日本語 Temperament and Character Inventory (TCI). *精神科診断学*, **7**, 379-399.
- 木村あやの・登張真穂・大山智子・首藤敏元・名尾典子 (2013). 大学生のボランティア活動と協調性との関連 パーソナリティ心理学第22回大会論文集, 108.
- 黒沢幸子・森俊夫・寺崎馨章・大場貴久・有本和晃・張替裕子 (2002). 「ギャング」「チャム」「ピア」グループ概念を基にした「仲間関係発達尺度」の開発 財団法人安田生命事業団38号, 38-47.
- 小西友七・南出康世 (2006). ジーニアス英和辞典第4版 東京：大修館書店
- Markus,H., & Kitayama,S. (1991). Culture and self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- 本明寛 (監修) (1989). 協調性 (Cooperativeness) 評価・診断心理学辞典 東京：実務教育出版 p.75.
- 新村出編 (2008). 広辞苑第6版 岩波書店
- 村上宣寛・村上千恵子 (1997). 主要5因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究, **6**, 29-39.
- 酒井恵子・久野雅樹 (1997). 価値志向的精神作用尺度の作成 教育心理学研究, **45**, 388-395.
- 澤田匡人 (2009). 小中学生におけるいじめに対する態度とシャーデンフロイデ 日本心理学会第73回大会発表論文集, 1010.
- 杉浦健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係—その発達的变化— 教育心理学研究, **48**, 352-360.
- 高田利武 (1999). 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程 教育心理学研究, **47**, 480-489.
- 谷伊織 (2008). バランス型社会的望ましき反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, **17**, 18-28.
- 登張真穂 (2003). 青年期の共感性の発達：多次元的視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148.
- 登張真穂 (2010). 協調性とその起源—AgreeablenessとCooperativenessの概念を用いた検討 パー

- ソナリティ研究, **19**, 46-58.
- 戸田弘二 (1988). 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル 日本心理学会第52回大会発表論文集, 27.
- トマセロ, M. (2013). 橋本和秀 (訳) ヒトはなぜ協力するのか 東京: 勁草書房
- 山岸俊男・亀田達也・巖佐庸・長谷川英祐・滝本彩加・山本真也・高橋伸幸・竹澤正哲・増田直紀 (2014). 社会のなかの共存 東京: 岩波書店
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成 教育心理学研究, **67**, 61-67.
- Yeates, K.O., & Selman, R.L. (1989). Social competence in the schools: Toward and integrative developmental model for intervention. *Developmental Review*, **9**, 64-100.

[抄録]

さまざまな側面をもつ概念として協調性概念を捉えなおし、大学生対象の調査をもとに協調的問題解決、調和志向、非協調志向、協力志向の4下位尺度からなる多面的協調性尺度を作成した。協調性下位尺度とさまざまな特性、経験との関係を検討したところ、協調的問題解決と協力志向、調和志向は、協調性と密接な関係があると仮定された変数と正の相関を示し、非協調志向はそれらの変数と負の相関を示した。協調的問題解決と協力志向はさらに、個の認識・主張、安定した愛着関係、違いを認める仲間関係、サークル活動への熱心さ、ボランティア活動の経験と関連があったが、調和志向は個の認識・主張と負の相関を示し、サークル活動やボランティア活動との関連を示さなかった。調和志向は個人的苦痛、評価懸念、拒否不安、アンビバレントな愛着関係、仲間からの同調圧力を感じることも関連していた。文科系の学生やサークルのリーダーは理科系の学生やリーダーでない学生より協調的問題解決の得点が高かった。また、委員会や音楽系、スポーツ系サークルに参加する学生は文化系サークルに参加する学生やサークルに参加しない学生より協力志向の得点が高かった。非協調志向の得点は男性が女性より高かった。他の年齢集団での調査や変数を加えた調査を実施し、尺度の妥当性をさらに検討する必要がある。
